ほくと遺跡ものがたり
～遺跡が語る北斗の歴史～ -番外編-

はるかむかし、旧石器時代・縄文時代から現代に至るまで、一万有余年の間ここ北斗の地で営まれ続けた人類の歩み―当コーナーでは、こうした北斗の歴史について、「遺跡」に焦点をあてて紹介します。今回は番外編、ショートコラムです。

現在の北斗市地域では約３００年前まで和人とアイヌの人々が共に交じり合ってくらしており、その名残であるアイヌ語由来の地名が今ものこっていることは当コラムで紹介してきたとおりです。

そこで、今回はその一部について抜粋し、少し詳しく紹介したいと思います。

・七重浜：nuwean-nay ヌウェアン・ナイ

〔意味〕獲物がたくさんとれる・沢

【古例】『松前西東在郷並蝦夷地所附』（享保12年・１７２７）「なゝえ浜」

【江戸時代別表記】七重のはま、七重乃浜、ナゝイ浜、七内濱（なないはま）

※かつて七重浜を河口とした石川は、上流の山裾（現在の七飯町中心付近、当時の七重村）とつながっていました。また、松浦武四郎『蝦夷日誌』には「七重濱は七重村の出郷なれば也」とあり、当時の川辺の豊かな恵みとそれがつないだ人の営みを感じさせる地名といえるでしょう。

・久根別：kunne-pet クンネ・ペッ

〔意味〕黒い（濁った）・川

【古例】『松前蝦夷記』（享保２年・１７１７）くんね別

【江戸時代別表記】くねべつ、くねべ川、クンベツ、ク子ベツ

※現在の北斗市平野部、特に久根別川と大野川の間は上流から堆積した黒色土壌であるため、そこを通る川は濁り、川底は黒く見えたのでしょう。

・有川：(h) aru-us-pet アル・ウシュ・ペッ〔意味〕食料・群生する・川

【古例】『津軽一統志』（寛文10年・１６６９）あるう川

【江戸時代別表記】あるか、ある川、有川、アリカワ　※ある川・あり川のブレは18世紀末におこり、のちあり川優勢に。

※かつて久根別川と大野川は下流で合流し、そこから河口までを有川と呼びました。つまり当時の有川の本流は現在の大野川を指すのですが、当時は細かく蛇行しており、河岸には収穫に適した植物（aru）が繁茂（us）していたのでしょう。それをあらわした地名であるといえます。

・戸切地：peker-pet ペケレ・ペッ

〔意味〕澄んだ（透明な）・川

【古例】『松前蝦夷図』（寛文８年・１６６７）へケレケレチ

【江戸時代別表記】へきれち、へけれち、辺げれち、辺化礼地、辺幾利知、戸切知

※クネベツ（黒い川）とある種対比となる地名です。実際、河床礫も多く、河水は比較的澄んでいるのが特徴です。この川の上流に現在位置しているのが北斗市の水がめの一つ、上磯ダムです。

・茂辺地：①mu-pet ムー・ペッ②mo-peci モ・ペシ

〔意味〕①塞がる・川②静かな・その川

【古例】『ゑぞの絵図』（寛文８年・１６６７）モヘチ

【江戸時代別表記】茂戸地・モンベツ

※時化などの時に河口が塞がるので「mu-pet」、静かに流れる姿から「mo-peci」と両方の説が江戸時代から存在します。後者の場合は道北の紋別や日高の門別と同じ語源ということになります。

・当別：①To-pet トー・ペッ②To-un-pet トー・ウン・ペッ）

〔意味〕①沼・川②沼・ある・川

【古例】『松前蝦夷図』（寛文８年・１６６７）トウヘチ

【江戸時代別表記】トウヘツ・トウベツ・トツフヘツ・トヲウンヘツ

※当別川の上流にかつて沼が存在していたことからついた地名です。なおその沼は江戸末期の頃にはすでに埋もれてしまっていたとのこと（『蝦夷日誌』）。

今は知り得ない土地の歴史を知ることができるのも地名を調べる楽しみの一つです。

ここまで、北斗市内にのこるアイヌ語地名を紹介してきましたが、今度は逆にアイヌ語ではない地名を紹介しましょう。

・大野

『大野町史』などで「onne（大）＋nup（野）」を語源説の一つに挙げていますが、「onne」（老いた）をこの形で「大きい」として使うことはなく、「大きな野原」を表現する場合は「sep-nup（広い・野原）」あるいは川沿いの地形条件であれば「si-nutap（大きな・平原）」となります。「大野」地名は『津軽一統志』（寛文10年・１６６９）より一貫して漢字表記であり、和語由来と見るのが自然でしょう。

・上磯

「「kamuy-so（神のor巨大な・滝）」「kama-iso（平たい・岩）」などの巷説が散見されますが、いずれも明治時代以降に音だけで当てはめられたものです。

そもそも、地名としての上磯は明治２年（１８６９）に松浦武四郎が郡名として提議するまで存在せず、江戸時代に用いられた記録はありません。

明治という新しい時代とともに生まれた地名である、と考えてよいでしょう。

このように、地名を調べると、各土地ごとの歴史や特性を知ることができます。皆さんもぜひチャレンジしてみてください。

（郷土資料館　時田　太一郎）